

論 文 審 査 の 要 旨

筆頭著者（学位申請者）氏名	井田 圭亮
主論文の題目 および 掲載誌・審査委員	題 目 A Study of The Clinical Manifestation of Subclinical Inguinal Hernias（鼠径部不顕性ヘルニアの顕性化に関する検討）
	掲載誌 Journal of St. Marianna University 2017;8:75-81
	主査 北川 博昭 副査 川瀬 弘一 副査 小島 宏司
<p>[論文の要旨・価値] 申請者らは鼠径ヘルニアでは膨隆などの臨床症状がない潜在性の鼠径ヘルニアを“不顕性ヘルニア”と定義し、当院で行った鼠径ヘルニアの術前に腹臥位 CT（ヘルニアスタディ）で撮影することで不顕性ヘルニアの診断が可能となった。そこで不顕性ヘルニアの顕性化率と、そのリスクファクターについて検討した。</p> <p>方法・対象: 2006年から9年間でヘルニアスタディを施行した931例を対象とした。この中で不顕性ヘルニアは175例(18.7%)で94例は同時手術を希望されず経過観察となった。94例中18例は外来経過観察中で、それを除いた76例にアンケートを行い59例で回答が得られた。今回の対象を77例とし、この中で顕性化率と顕性化までの期間について検討した。また顕性化群と非顕性化群で、年齢、性別、ヘルニア門の大きさ、Body mass index(BMI)、腹部手術の既往、腹膜透析、併存疾患（前立腺疾患、慢性呼吸器疾患、糖尿病、虫垂炎、腹部大動脈瘤、心疾患、整形外科疾患）、有症状側のヘルニアの大きさの各項目について比較した。なお本試験は当院倫理委員会（承認番号；1065）の承認を受けている。</p> <p>結果: 調査対象77例中21例（27.3%）にヘルニアの顕性化を認めた。顕性化までの期間は平均29.9ヶ月（±32.6）で、中央値は14ヶ月（3ヶ月-105ヶ月）であった。Kaplan-Meier 曲線を用いて顕性化とその期間を分析すると5年間で18例(23.3%)が顕性化し全21例が105ヶ月で顕性化した。顕性化群(21例)、非顕性化群(56例)の比較では、年齢は顕性化群68.5歳、非顕性化群65.9歳（P=0.336）で有意差無し。男:女比も有意差は認めず。ヘルニア門は顕性化群19.04mm、非顕性化群19.48mm（P=0.818）、BMIは顕性化群23.9 kg/m²、非顕性化群22.9 kg/m²（P=0.139）で差は認めなかった。初回手術を行った有症状側のヘルニア嚢は顕性化群で157.6cm³(±119.1)、非顕性化群で77.8cm³(±103.9)で有意差を認めた(P=0.029)。有症状側のヘルニアの大きさをROC 曲線で cut off 値は44.5cm³であった。44.5cm³以上の症例は77例中40例で、この中の32.5%（13例）が5年以内に、37.5%（15例）が観察期間内に顕性化した。一方、44.5cm³未満の37例は13.5%（5例）が5年以内に顕性化した(P=0.021)。</p> <p>考察: 有症状側の手術後に発症する対側鼠径ヘルニアは鼠径部ヘルニア診療ガイドラインでは10年間で3.8%を認めた。今回不顕性ヘルニア77例を平均観察期間79.4ヶ月で検討した結果23.3%が5年間で顕性化し、27.3%が14ヶ月の中央値で顕性化した。一般に鼠径ヘルニア発症の危険因子は年齢、体型、前立腺手術、慢性的咳であったが、今回は顕性化群と非顕性化群ともに全項目で有意差がなかった。今回、顕性化群と非顕性群の間に差が認められたのは有症状側のヘルニア嚢が44.5cm³以上では顕性化率が有意に高かった。大きなヘルニアを戻すことで腹圧の上昇が大きく、後に対側のヘルニアが顕性化することがある。この場合は同時もしくは早期対側手術を推奨できると考えた。</p> <p>結論: 今回不顕性ヘルニアの顕性化率と顕性化の危険因子について検討した。不顕性ヘルニアの顕性化率は5年で23.3%。顕性化の危険因子は有症状側のヘルニア嚢が44.5cm³以上であった。</p>	
<p>[審査概要] 主査と副査2名、指導教授、医局員数名陪席のもと power point を用いた発表がありその後質疑応答が行われた。不顕性ヘルニアの定義が一般的でないこと、画像上不顕性ヘルニアと言われる中には小さなヘルニアが認められる点、臨床上膨隆が認められることが顕性ヘルニアと診断した場合、皮下脂肪の厚い体型では診断がしにくい等の質問が出た。また、教室として行われているヘルニアスタディーが合計931例になりこれらのデータを用いた自然対側発症率などを検討してはどうか等の質問が出たが、研究の弱点や改善点などをよく理解し的確に回答された。今後のヘルニアを用いた教室の研究についても述べられた。</p>	
<p align="center">最 終 試 験 結 果 の 要 旨</p>	
<p>[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 発表はわかりやすく図表を用いた構成でその内容から申請者は本研究に関する幅広い知識を持っていると判断した。質疑応答に関しても誠実で丁寧で学位を授与するに値する人物と判断した。英語能力は学位論文の英文も良く校正されており引用論文の翻訳も適切であった。</p>	